

出産に対するSelf-Efficacy Scale の開発 (2)

著者	亀田 幸枝, 島田 啓子, 炭谷 みどり, 坂井 明美, 山口 益美, 酒井 照枝, 加藤 美奈子, 前浜 静香, 定仙 光代
雑誌名	日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery
巻	14
号	3
ページ	122-123
発行年	2001-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/34928

doi: 10.3418/jjam.14.3_122

25. 出産に対するSelf-Efficacy Scale の開発(2)

金沢大学医学部保健学科 ○亀田 幸枝 島田 啓子
炭谷みどり 坂井 明美
公立能登総合病院 山口 益美
富山県立中央病院 酒井 照枝
国立金沢病院 加藤美奈子
恵寿総合病院 前浜 静香
公立羽咋病院 定仙 光代

I. 緒言

女性にとって出産体験は、母親および家族の一員として発達していく重要な体験である。出産教育の目的は、妊婦が出産に向けて自己の持てる力を十分に発揮できるように援助することと考える。Bandura は、人間の行動を決定する先行要因に、自分の行動がもたらす結果を予測する「結果予期」と、その行動遂行に対する自分の能力への自信を予測する「効力予期」をあげた。これらの概念に基づき、出産に対する self-efficacy を測定することは、出産時の産婦の行動を予測することが可能になる。また、出産に向けて援助方略を検討したり、出産教育の評価にも有用と考える。欧米では Childbirth Self-Efficacy Inventory の検証が報告されているが、日本の医療体制や文化的背景にあったものは見当たらず、著者らは開発に向けて検討を行ってきた。

本研究は、Self-Efficacy Scale の再検討・洗練化を試み、その信頼性・妥当性を検証した。

II. 研究方法

1. 2000年7月～8月に、北陸2県の産科10施設で健診をうけた妊娠28週以降の妊婦413名を対象とした。有効回答数は352名(85.2%)であった。健診前または妊婦教室前の待ち時間に研究目的を説明し、承諾の得られた妊婦に質問紙を配布し回答後に即時回収した。

2. 対象の属性

年齢は17～39歳、平均年齢28.4±4.0(SD)歳で初産婦210名(60.0%)、経産婦142名

(40.0%)であった。妊娠週数は平均34.2±2.8週であった。

3. 尺度作成と調査で採用した測定尺度

出産に対する Self-Efficacy Scale (島田他、2000)を基に、満足な出産体験を構成する概念(常磐他、2000)を追加して修正した。更に、「結果予期」と「効力予期」の2側面を判別して測定できるように同じ設問に対して教示を違わせた。教示は、「結果予期」の場合「自分のお産の時どれくらいできるか」とし、「効力予期」は「妊娠中にどれくらい準備や対処する自信があるか」とした。内容妥当性を検討するために臨床助産婦3名と助産学研究者3名に意見を求めた後、妊婦4名を対象に予備調査を行い理解困難な内容や表現を修正した。また各々の評定は、「ほとんどできない(0点)」～「十分にできる(5点)」の5件法とした。以上より、最終的に「結果予期」26項目、「効力予期」26項目の計52項目からなる尺度を作成した。

基準関連妥当性を検討するために、意欲を測定するモラル尺度(三隅他、1976)を出産に適用するように修正したもの(以下、「出産モラル尺度」とする)と、達成動機測定尺度(堀野、1987)の中の「自己充實的達成動機尺度」の2つを用いた。評定は、「出産モラル尺度」は「全く思わない(0点)」～「非常にそう思う(4点)」の4件法、「自己充實的達成動機尺度」は「全然あてはまらない(0点)」～「非常によくあてはまる(7点)」の7件法とした。本研究におけ

る各尺度の Cronbach の α 係数は、「出産モラル尺度」は $\alpha=0.781$ 、「自己充實的達成動機尺度」は $\alpha=0.853$ であった。

分析は、統計解析ソフト Statview.Ver.5 を用いた。

III. 結果

1. 尺度項目決定のための分析

1) 項目分析

「結果予期」および「効力予期」の尺度項目の回答分布に著しい偏りがないことを確認した。次に、項目間相関 $r=0.8$ 以上で項目内容の類似しているもの、あるいは項目間での負の関連性がないかを調べた。その結果、いずれにおいても該当する項目はなかった。

2) I-T 相関分析

「結果予期」と「効力予期」各々の項目と項目の全体得点の相関係数を求めた結果、どちらも $r=0.4$ 以下の相関の低い項目はみられなかった。

3) 因子分析

「結果予期」26 項目を因子分析（主因子法、直交 Varimax 回転）した結果、固有値 1 以上の 4 因子が抽出された。全ての項目で第 1 因子の負荷量が最も高く（0.527~0.790）、寄与率 44.6% の単一因子と解釈した。

同様に、「効力予期」26 項目を因子分析した結果、固有値 1 以上の 4 因子が抽出された。1 項目のみ第 3 因子の負荷量が 0.590 と最も高かったが、第 1 因子の負荷量 0.573 と近似しており、他の項目は全て第 1 因子の負荷量が最も高かったことから 26 項目の単一因子とみて差し支えないと解釈した。

4) 尺度の信頼性の検討

「結果予期」、「効力予期」について、Cronbach の α 係数により信頼性を検討した。その結果、「結果予期」は $\alpha=0.92$ 、「効力予期」は $\alpha=0.92$ であった。また、折半法による信頼性係数は、「結果予期」は 0.97、「効力予期」は 0.97 といずれも高い信頼性が示された。

2. 基準関連妥当性の検討

1) 「出産モラル尺度」および「自己充實的達成動機測定尺度」との相関

「出産モラル尺度」との相関については、「結果予期」($r=0.536, p<0.001$)、「効力予期」($r=0.514, p<0.001$)とどちらも有意な正の相関を示した。また、「自己充實的達成動機測定尺度」との相関は、「結果予期」($r=0.234, p<0.001$)、「効力予期」($r=0.272, p<0.001$)と有意な弱い正の相関を示した。

IV. 考察

出産に対する Self-Efficacy Scale の信頼性を検討した結果、「結果予期」と「効力予期」の双方で高い信頼性係数が得られたことより、内的整合性が確認できた。また構成概念妥当性については、因子分析の結果「結果予期」、「効力予期」共に単一因子の尺度と解釈可能であることがわかった。寄与率は「結果予期」が 44.6%、「効力予期」が 46.9%とほぼ妥当なものと考えられた。更に今回、基準関連妥当性を「出産モラル尺度」と「自己充實的達成動機測定尺度」の 2 つの尺度との関連からみた。「出産モラル尺度」とは、出産という目標に対して意欲的・積極的であるかを測定する尺度である。また「自己充實的達成動機測定尺度」は、価値あるものに挑戦し、それを成し遂げようとする傾向の強さを測定するものである。出産を価値あるものと認め乗り越えようと思えたり、出産に対する意欲や積極性が高ければ出産に対する準備行動や期待する出産の結果への自信につながることが考えられる。「結果予期」と「効力予期」がそれぞれ、「出産モラル尺度」・「自己充實的達成動機測定尺度」のどちらもとも正の相関関係にあったことは、出産に対する Self-Efficacy Scale の妥当性を裏付けるものと考えられた。

以上より、出産に対する Self-Efficacy Scale は、妊娠後期の妊婦の出産に対する心身の準備や姿勢、自信感を予測してケアに活用するときには便宜的に使用可能な尺度と考えられる。今後、どのような援助や介入が self-efficacy と関連するのか、妊娠中の self-efficacy の変化および出産教育前後の変化を調査していく中で尺度を検証・洗練していく必要がある。